

# 自閉症児の情動研究の現状と今後の課題

横田 千賀子\*

近年の自閉症スペクトラム障害（Autism Spectrum Disorder以下、ASD）児の情動に関する先行研究を整理し、研究動向を明らかにし、今後の研究課題について検討を行った。その結果、研究動向として、ASD児の情動が欠如していることや定型発達児との差異が強調された研究から、環境をととのえた療育的なかかわりの中で情動を育む研究へと移行してきていることが明らかとなった。今後の研究課題として、（１）情動と他の発達領域との連関について、（２）ASD児の情動調整の困難さ、外在的及び内在的調整の様相を明らかにすること、（３）情動のもつ身体性を明らかにする研究の必要性、（４）二者関係としてASD児の情動を理解する研究の必要性、以上４点を示した。

キーワード：自閉症、情動、情動共有、情動調整、発達支援

## I. 問題と目的

子どもの発達にとって、他者との情動的なつながりが不可欠である（Bowlby [黒田・大羽・岡田訳] 1976:252)。また、情動は子どもが人とかわり、周囲の事物へ働きかけることを促す動機になる（Emde [小此木訳] 2003:53)。そして、子どもは外界からの働きかけで得られた結果に、喜んだり、悲しんだり、怒ったり、怖がったりしながら、他者や事物への働きかけを繰り返し、情動を伴う経験を重ねていくことが明らかとなっている（Sroufe 1995)。

また、情動には似た対象に類似した情動を感じやすいという伝染する機能があり、他者と一緒に楽しい、悲しいという共有経験を作りやすい（やまだ 2010:64-66)。この機能は、他者と同じ情動をとることで、他者の身になる（Hobson [木下監訳] 2003:84-86) ことを可能にする。これまでの先行研究より、情動は、人や物と相互作用を蓄積していく子どもの発達を支える重要な機能を有している（Emde [小此木訳] 2003:39-61) ことが明らかとなっている。

---

\* 淑徳大学大学院総合福祉研究科社会福祉学専攻博士後期課程単位取得満期退学、淑徳大学発達臨床研究センター発達相談員

情動を人と環境との相互作用という観点からとらえている Trevarthen ([中野・伊藤・近藤・根ヶ山・韮負訳] 2005: 112-120) は、情動は外界の事物(もの)とのかかわりの中では事物に対する行動や判断、記憶に影響すること、自己の身体内においては生理的現象と外界との均衡性に影響すること、そして他者との間では情動的、意図的にかかわりあうといった社会的機能に作用することを明らかにしている。つまり、情動は人との関係性の発達に限らず、事象の理解といった認知の発達にも関与しているといえる。加えて、遠藤(2013: 16)は、Emotion(情動)という言葉は、“外”を示す“e”と、“動作・運動”を示す“motion”に分けられ、情動が個人内に有するわけではなく、外に向けて強く出され、何らかの動作や行為に至るという一連の過程が想定されると述べている。このように情動が“外”へ向かうこと、つまり外界の対象との間で生じるもの、対象に向けられるものとする見解が一般的となっている。これら情動のもつ機能を踏まえると、情動とは「内的刺激や外的刺激に対する反応として生理的变化を伴い、生じる過程であり、行動や思考を動機づけ方向づける過程、及び個人と外界の関係を確立・維持する過程」と定義できる。

しかし、生まれながらにして他者との情動的なつながりにくさを生じる場合がある。障害児、とりわけ自閉症スペクトラム障害(Autism Spectrum Disorder, 以下ASD)児者は、この側面での課題を多く持っている。養育者の手記(高橋 2010: 19-20)や小児科医師の記録(中沢 2001)では、ASD児のもつ情動的なつながりにくさや泣きをなだめにくいといった情動にまつわる問題は、生後間もなくから始まり、また生活に直結した問題として述べられている。また、関係療法の立場である小林(2017: 389-390)は0歳代、1歳代で明瞭に関係のねじれ、つまり情動的なつながりにくさが生じていることを述べている。

現在、ASDは、社会的コミュニケーションの障害、行動、興味、活動の限局された行動パターンを中核的な特徴とする障害であるとされている(American Psychiatric Association [高橋・大野監訳] 2014: 49-57)。Kanner ([十亀・斉藤・岩本訳] 1978: 250)が、早期幼児自閉症として「人々との情緒的接触を通常形で持ち合わせない」11例の症例を発表して以来、原因論は幾度かの変遷はあったが、一貫して対人関係を含む社会性の障害が中核的な困難さとされてきた。だが、ASDの示す対人関係の困難さは、近年、他者との関係の在り方によって、あるいは発達によって力動的な変化の過程をたどることがわかっている(別府 2001: 38-43)。また、ASDに対するアプローチは社会性を伸ばし、関係性の側面へアプローチすることに注目が集まっている(黒田 2007: 241)。つまりASDの情動共有の経験を土台としたつながりにくさに対し、いかに理解し、支援するかという研究が一層求められると予想される。

加えて近年、対人関係の構築や維持、社会的な適応に情動調整が大きく影響すると考えられている(Eisenberg, Hofer, Sulik, & Spinrad 2007: 157-158)。情動調整とは、我々がどの情動をいつ有するか、その情動をどのように経験し、表出するかを含むプロセス(Gross 2008: 499)と定

義され、情動の増減や維持が含まれる。また、調整される対象はネガティブ情動の調整だけではなく、ポジティブな情動の調整も含まれることが言及されている。Gross and Thompson (2007:6) は、発達初期では他者が深くかかわる外在的情動調整のプロセスに焦点があてられ、成人を対象とした情動調整研究では主として自身による内在的情動調整プロセスに焦点があてられることを示している。

情動調整行動の発達においては、養育者とのかかわりが重要な役割を担っている (Emde and Sorce [小此木訳] 1988)。乳幼児期における情動調整行動を概観した金丸 (2017:54-55) は、情動調整行動の発達として、まず養育者の働きかけによる情動調整、次に情動を安定させる資源としての養育者の活用、そしてことばを用いて伝達することでの情動調整へと調整方略のレパートリーが変容していくことを示している。情動調整の発達にかかわる重要な側面として、他者と関わる事が挙げられる。本邦においても、情動調整の発達と、他者と関わる関係性の発達には相互関連性があることが指摘されている。具体的には、情動調整機能の発達においては、初期段階であればあるほど、家族や保育者といった大人の介入が調整に大きく関与するが、加齢に伴い、次第に調整方略を大人のかかわりを足場として、自ら拮げていく姿が確認されている (金丸・無藤 2004; 金丸・無藤 2006; 金丸 2017)。

これらの知見を踏まえると、他者との情動的なつながりにくさを有する ASD 児は、情動調整に関しても困難を抱えることが予想される。だが、佐々木 (2008:147) は、ASD 研究において情動に直接かかわっていくという立場は少なく、むしろ情動にまつわる問題は発達の阻害要因として扱われてきたことを指摘している。ASD の情動にまつわる問題は、ASD 特性として理解されやすく、問題行動として対症的に扱われることが多く、問題の意味や情動の理解には至りにくい (関 2012:14)。加えて、学童期以降に顕著となる情動調整の問題は乳幼児期に遡って検討することの必要性が強調されている (杉山 2002; 別府 2006) が、研究として扱われる対象は、集団や社会適応が求められる学童期以降が中心であり、乳幼児期を扱った実践的な研究は十分ではない。直接的に目に映らない情動の動きや ASD 児とかかわる大人の関係性そのものは看過されてきたという指摘もあり (榎原 2013:273)、ASD 児の情動の理解は発達支援において喫緊の課題と考える。

そこで、本稿では、ASD 児の情動に関する先行研究の動向を明らかにし、今後の研究課題について論じることを目的とする。本稿では、学童期以降の社会生活で直面する情動調整の問題は、乳幼児期の他者との情動的なつながりにくさが背景にある (杉山 2002; 別府 2006) と考え、対象を乳幼児期の ASD 児に限定して論考する。

## Ⅱ. 自閉症児の情動の特徴

これまでの乳幼児の発達研究より、ASD児の共同注意の獲得が困難であることが明らかとなっている (Mundy, Sigman, Ungerer, & Sherman, 1986; Kasari, Sigman, Baumgarther, & Stipek, 1993)。共同注意とは、コミュニケーションの基盤として、生後9か月以降に観察される発達の重要なマイルストーンである (Tomassello [大堀・中澤・西村・本多訳] 2006: 79)。この三項関係成立の前提として、他者との情動共有の関係が成立していることが明らかになっている (大藪 2004: 95)。また、ASD児は共同注意行動の一つである指差し行動においては、他者の指差しへの応答を精神年齢の高まりとともに獲得していく一方で、共同注意行動を始発する行為や他者の視線を追従することの難しさは変化が見られにくいことが明らかになっている (別府 1996)。また、ASD児の共同注意の障害は、他の障害にみられず、ASD特有の障害であることが示されている (Mundy and Sigman 1989)。これらの研究は単にASD児の共同注意の獲得の困難さを明示しただけではなく、困難さの背景にある他者との情動共有に遡って検討する必要性を示した研究といえる。

ASDの情動の特徴を示す研究として、Yirmiya, Kasari, Sigman, and Mundy (1989) は、半構造化場面におけるASD児の情動表出の特徴を分析した。その結果、ASD児はポジティブな表情とネガティブな表情が混同した表情が精神発達遅滞児や定型発達児に比べて多く生起していることを示した。また、Kasari, Sigman, Mundy and Yirmiya (1990) は、注意の共有と情動の共有の関係について検討し、ASD児は精神発達遅滞児や定型発達児に比べて共同注意にポジティブな情動が付随することが有意に少ないことを示し、ASD児の共同注意の障害は他者との情動を共有することの困難さに関連していると示唆した。加えてJoseph and Tager-Flusberg (1997) は、ASD児、ダウン症児、定型発達児の母親との相互作用における情動表出について検討し、ASD児はポジティブな情動表出の生起頻度が他の群と比較すると少ないことや、母親の顔に注意を向けた状態でポジティブな情動を表出する生起頻度が少ないことを明らかにした。これらの定型発達児や他の障害児との比較を基にした研究結果より、ASD児の共同注意の障害や情動表出の欠如を示していることがわかる。これらの成果は、早期発見やスクリーニングといった判別に貢献する有用な知見となったが、ASDの障害を強調する内容とも考えられる。しかし、当事者の手記 (綾屋・熊谷 2010) にみられる記述には、つながりたいがつながれないといったずれが記述されており、他者から客観的に観察されることと本人の内的状態の不一致が存在することが述べられており、単に障害や欠如という言葉だけでは内的状態を十分に理解できないことは明らかである。

これまでの共同注意研究により、特に、共同注意のもつ他者とある対象への注意を共有する機能、つまり共同注意の情動的側面の理解と情動の共有に困難があることに着目する重要性が示された。共同注意には情動が強く関与しており、コミュニケーションには情動の伝達性を伴うことが明らかになった (Kasari, Sigman, Mundy & Yirmiya 1990; Mundy & Sigman 1989)。言い換える

と、ASD児の共同注意の障害は、共同注意に情動が関与されにくく、コミュニケーションに情動の伝達性が伴わない状態であるといえる。別府（2005）も、共同注意の障害は、他者とともに情動を共有する経験の障害であると指摘している。

筆者（関 2010）は、ASDの特徴をもつ幼児17名（24～31ヶ月：平均25.7ヶ月）と特徴を持たない幼児19名（19～30ヶ月：平均23.6ヶ月）を対象とし、大人との遊び場面のなかでの共同注意行動や、共同注意に随伴する情動表出の特徴について検討を行った。その結果、ASD児においては共同注意行動の生起は見られるものの量的に少なく、観察された姿は興奮した快情動の表出や過度な不快表出といった特徴を示し、微笑むといった中間的な情動表出がまれであった。共同注意に随伴する情動表出の比率には、ASDの特徴を有さない幼児と有意差は認められなかったことを明らかにした。筆者の研究実施にあたり、2歳代のASDの特徴を有する幼児の自発している共同注意行動は確かに少ない様子は明らかではあった。しかし、定型発達児の示す明確なアイコンタクト、指差し、提示といった共同注意行動の明確な行動基準に合致しないが、個々の子どもなりの発信やかかわりは確かに意味を持って存在しており、相手がいかに確実に受け止め、応答的にかかわる姿勢をとれるかが重要であることが示唆され、療育の可能性や発達支援の手ごたえが得られた。この点は、Bates（1975）が前言語の発達段階では情動をくみ取る大人の存在が重要であるという主張やASD児が共有基盤の脆弱性はあるが安心できる他者の前では情動的なつながりを示す（Sigman & Ungerer 1984）先行研究の知見と共通する考えである。

### Ⅲ. 自閉症児の情動共有の課題とその支援

ASDは、情動の共有、共同注意や共同注意を基盤とした模倣、象徴遊びは生起しにくいだが、感覚運動遊びは快の情動を伴って楽しむことが示されている（井上2005；Sigman & Ungerer 1984）。この点を利用して、高橋・伊藤（2006）は、子どもの身体感覚に働きかけるくすぐり遊びやゆさぶり遊びなどの情動的交流遊びを行った。別府（1991）も、ゆさぶり遊びを通して、快情動をもたらした療育者とのあいだに愛着関係が形成され、その後、外界への積極性が増したことを報告している。情動共有を中心とした遊びの意義を指摘した報告は他にもある（伊藤・近藤・木原・松田・小島 1991；伊藤 1998；三宅・伊藤 2000）。例えば、伊藤・近藤・木原・松田・小島（1991）は、くすぐり遊びや揺さぶり遊びを情動的交流遊びとし、ASD児の母子遊びのプログラムに位置づけて効果検討を試みた。結果、情動的交流遊び場面で情動の共有が成立した子どもはコミュニケーション行動の発達が認められ、共有が成立しなかった子どもはコミュニケーション行動の発達が認められず、情動的交流遊びによる情動共有の成立が、ASD児のコミュニケーション発達の役割を担うと示した。また、李・田中・田中（2010：213）は、ASD児の児童1名を対象とし、情動共有の形成による共同注意行動の変化について、情動的交流遊びでの変化

を通して検討を行った。その結果、児童と教師との情動の共有が深まるにつれ、からかい行動や自発的提示、参照視など高次の共同注意行動が見られるようになった。どのような種類の情動的交流遊びを行うかは、その子どもが好きな感覚を見つけることが必要であるが、可能な限り対人的な遊びに向かうような働きかけが求められる（伊藤 1998）。三宅・伊藤（2000）は大型遊具を利用した身体遊び、黒山・針塚（200：241）は音楽とコミュニケーション行動の関連で研究を行った。いずれの研究も、模倣の活発化や相互作用、遊びの継続性の高まりが明らかになった。

伊藤（1998）の述べるように、可能な限り対人的遊びに向かうように働きかける前提のもとで情動的交流遊びが展開されるならば、働きかける他者のもつ環境的要因も強調されるべき点であると考えられる。やみくもにくすぐり遊びや直接的な対人遊びを導入するというものではなく、導入の前提として発達理解を通して、ASD児のわかる世界の遊びを提供することで、了解可能な情動的交流遊びが展開されると考える。

情動的交流遊びの導入により、快表出の高まり、コミュニケーション発達や対人関係の育ちが認められることから、比較的低年齢での段階での導入には意義があると考えられる。しかし、人と人との直接的な二項関係に対し、侵襲性や不安、感覚過敏による混乱を呈する場合も予想される。支援の観点から、串崎・田中（2009：7）は、ASD児のもつ接近・回避的な葛藤を理解しつつ、感覚運動遊びや身体的なアプローチが支援の手掛かりとなることを示している。

また、綾屋・熊谷（2010：98-131）は、当事者研究の中で自身の感覚や行動を他者が承認し意味を与えてくれる体験により自己感が立ち上がり、それが他者への共感的理解を生じやすくすると指摘している。綾屋・熊谷（2010）の指摘は、ASDの情動が欠損しているわけではなく、私たち定型発達児者とは一致しないだけであることを示しており、かかわり手が可能な限り、相対するASDの志向に沿った情動の共有体験を保障できるかが重要であるといえる。この綾屋・熊谷（2010）の指摘は、伊藤（1998）がASD児の志向する遊びに沿って展開する情動的交流遊びで生じる情動共有の成立と同様である。

ASDに対するアプローチが、歴史的変遷に伴い、発達の変化が評価されやすい認知や行動的側面から社会性を伸ばし、関係性の側面へと注目が集まっている（黒田2007：241；別府 2013：67-68）。社会性とは人とのかかわりあいであり、ASDの中核症状の領域といえる。この社会性を育むアプローチの中に、情動共有が組み込まれ、展開されている。次に、各アプローチの中で情動共有がいかに扱われているかを述べていく。

まず、対人行動面における情動的コミュニケーションに焦点を当てた介入としてSteven and Gutstein（〔杉山・小野監修〕2001）の対人関係発達指導法（Relationship Development Intervention: RDI）による療育がある。RDIでは、発達のレベルによって6段階の経験共有を想定し、各段階にふさわしい経験共有の内容を、構造化された場面で自閉症幼児の体験してもらう。発達のレベルにあわせた自他間の経験共有が立案されている点の特徴である。

また長崎・中村・吉井・若井（2009）は乳幼児の発達研究を踏まえ、社会性発達支援プログラムを開発した。ASD児の社会性の発達には、情動の共有が伴った大人と子どもの具体的なかかわり合い（共同行為）による相互作用によって促されることを示している。長崎らは社会性を人と何かを共にし、またそのことを楽しむこと（共同行為）と考え、行動と情動の共有、目標と知覚の共有、意図と注意の共有という社会性の3段階、模倣・役割理解、共同注意、情動共有、コミュニケーションの4領域についてアセスメントし、発達支援レベルにあったプログラムを提案している。社会性発達支援プログラムにおいて、情動の共有は、二項関係の遊びの中で、大人への関心を高め、子どもが楽しい（心地いい）と感じながら大人と情動を共有するとされている。情動共有への支援として、自発的な情動表出、支えられた情動共有、自発的な情動共有の3段階を提唱している。子どもの好む遊びに対し、型（フォーマット）を設定することで、自発的な情動共有へ結びつける支援の道筋を示している。情動的交流遊び同様に、子どもの好む遊びの提供、楽しい・心地いいといった快情動の二項的な共有から始まるといえる。次第に、遊びやゲームといった役割活動といったフォーマットに展開していく点は、発展性をもっていると考えられ、実証的な研究の高まりが今後予想される。

加えて、社会性発達支援プログラムの視点として、共同行為に関する研究を整理したい。吉井・長崎（2002）は、ASD児を対象にボールのやりとりゲーム習得を目的とした共同行為フォーマット獲得による指導を行った。指導の過程では、ボールの受け手-投げ手の共同行為フォーマット獲得の援助、児の動作の逆模倣や発話を伴う情動喚起の援助を行った結果、ボールを受け、投げることを獲得し、やりとりの中で情動共有が成立、そして他者を志向した行為の始発が生じたことを明らかにしている。これは、快情動の生起や情動共有が、ASD児の他者の志向性にも影響した実践と考えられる。

以上、情動共有をテーマとした研究及びアプローチを概観すると、快情動を通じた情動共有が、ASD児の発達において貢献することが明らかになった。また、快情動の高まりや情動共有が認知の育ちに貢献し、自発的な外界への志向性の原動力となる可能性が見出された。一方で、情動共有の多くは“快”を取り扱うものが多く、不安定さや不均衡な不快情動を対象としたものはASD児研究では見当たらない。さらに、いずれのアプローチも社会性という枠組みの中で情動共有の重要性が論じられており、他の発達領域との連関について言及されていないことに課題があると考えられる。これらのアプローチに一定の効果研究がなされていることを踏まえると、支援者としてアプローチの枠組みが示されていることの有用性は認められる。一方で、ASDの中核課題を克服すること、できるようになることが求められる支援に偏重しないかという懸念や枠組みに合わせられない事例に対して、どのような解釈がなされるか、危惧される。

#### IV. 自閉症児の情動調整の課題とその支援

次に、ASDの情動調整の困難さについての研究を論じていく。定型発達の場合、心を理解することと調整して適切な行動をとることは密接に関連して発達するが、ASDの場合、理解することと調整することにずれが生じやすく、大きな課題となる（別府 2013:67）。そこで、別府（2013:69-70）は、定型発達児の情動調整を形成・阻害する要因を手掛かりに、ASD児者の情動調整の障害形成プロセスを検討している。定型発達児は生まれながらに、養育者になだめてもらうことを通して外在的調整を行い、次第に自分の情動を調整する内在的調整に発達する（金丸 2017）。しかし、ASD児の場合、外在的調整が成立しにくい。そもそも養育者にとって情動反応がわかりにくく、なだめてもらってもうまく調整されにくい事態に陥りやすい（滝川 2017:246-247；別府 2013:69-70）。背景として、別府（2013:69-70）は感覚過敏・鈍麻による快-不快といった情動と体験の不一致が想定され、外在的調整経験の乏しさだけではなく、調整を支える共有経験そのものも乏しくなるとし、ASD児者独自の感覚に寄り添う支援として、共有経験を保障することで、調整へ結びつくと考えている。つまり、ASD児の情動調整を定型発達児のものと同様に扱うことができないと考えられ、個々の事例でみられる情動調整の困難さを理解していく必要があるだろう。

また、永瀬（2017）は、情動調整の困難さがASDの一次障害と関連している点、情動調整の困難さが社会的適応にネガティブな影響を与える点をあげ、幼児期後期から青年期を対象にした近年の情動調整の際に用いられる調整方略や認知行動療法の考えに基づく介入の効果を扱った研究動向を調査している。その結果、再評価方略（潜在的に情動を喚起させる状況を情動が喚起されないように解釈すること）の困難さや、その困難さが使用頻度の少なさ、自発的使用の困難さ、有効性の認識の困難さが相互に関連していることを明らかにした。情動調整の研究動向においては認知的方略を使用する内在的調整が中心であること、対象が幼児期後期から青年期と幅広いために発達プロセスが十分理解されている段階ではないと考えられる。

定型発達児の情動調整研究に比べると、ASD児の情動調整に関する実証的、実践的研究は十分とは言えず、情動調整の実態や理解についての研究が期待される。一方で、ASD児の情動調整への支援方法についてはSCERTSモデルやJASPERといったアプローチの枠組みの中にすでに組み込まれており、支援の手掛かりが示されている。

まずPrizant, Wethweby, & Laurent（2006）は、ASDの中核障害が社会性であるという立場から、社会性の発達を3領域に分け、各領域の発達レベルを想定した評価を行い、支援の在り方を提案するSCERTS（Social Communication, Emotional Regulation, Transactional Support）モデルを開発した。SCERTSモデルとは、ASD児者のコミュニケーションや情動調整の能力を支援するための包括的、学際的アプローチである。社会コミュニケーション（Social Communication）、情動調整

(Emotional Regulation), 交流型支援 (Transactional Support) の3領域からなるアプローチである。SCERTSモデルでは、情動調整を当事者自身が情動を調整する能力に取り組む自己調整と、他者に援助を求めたり、他者からの援助に応じて調整する相互調整の2つを提唱している。情緒不安からくる問題行動を、環境要因やスキル不足の問題とせず、当事者の情動調整能力、スキルと環境の不均衡ととらえ、発達支援の対象とみなしている。また、このモデルは語用論を起点とし、日常場面でどのような機能を持ち、自発的に用いられるかを重視しており、非機能的なスキル学習には否定的な立場をとっている。

また、JASPER (Joint Attention, Symbolic Play, Engagement, and Regulation) という発達と行動の原理に基づいた介入アプローチ (Connie, Stephanny, Tanya, Connie, Susan & Amanda 2005; Connie, Stephanny, Tanya 2006; Goods, Ishijima, Chang & Kasari 2013) の中にも情動調整が取り込まれている。JASPERは、ASDの中核症状である対人コミュニケーションの改善を目指し、共同注意、象徴遊び、相互的なかかわり、調整といった社会的コミュニケーションの基礎をねらいとし、社会的コミュニケーションの円滑化やより複雑なコミュニケーションを増やしていくものである。対象は1歳台から小学生までと適応範囲があり、導入期が1歳台と早期支援に着目していることがわかる。大きな特徴としては、ASDの汎化の問題を踏まえ、実際の家庭や保育園等の自然な文脈の中で展開される発達支援であること、また日常的に接し支援にあたる人が実施可能な支援である (黒田 2016 : 151-155 ; 浜田・辻井 2015 : 18-21)。JASPERにおいては情動を意味する emotion という言葉は明記されていないものの、調整を意味する regulation という言葉で、子どもの情動調整の困難さへの支援を記述している。方法としては、①環境の評価、②選択を与える、③遊びのモデル、④対人的調整をあげ、困難さへの対応の枠組みを示している。1歳台の早期介入を謳うJASPERにおいて、調整が早期支援の対象となっていることは、ASD児の情動調整の困難さが乳幼児期からあるという事実を示している。同時に社会性構築の基礎、つまり情動共有と情動調整が支援の軸として組み込まれていることは、両者が発達の関連をもっていることも意味する。しかし、情動調整の困難さという一言で状態像を理解し、同一の対応することは難しい、というのが臨床に携わる者の共通の理解ではないだろうか。例えば、吉井・長崎 (2006) は、ASD児が情動知覚に障害をもつこと (Hobson [木下監訳] 2003 : 87) を踏まえ、他者のポジティブな情動的関与にASD児が十分に感じられないことがフォーマット獲得の困難さに影響している可能性を考えた。そこで健常乳幼児の共同行為フォーマットの習得場面に、他者の情動的関与の違いが及ぼす効果について検討したところ、ポジティブな情動的関与が乳幼児の情動表出に貢献することが明らかとなった。この報告は、情動共有、情動調整いずれも乳幼児自身の情動が、かかわる他者の情動的関与によって様相が変容することを意味していると考えられる。

これらを踏まえると、ASDの情動調整研究において、情動調整の困難さの実態を明らかにすること、情動調整の発達プロセスを明らかにすること、及び情動調整が困難な状態に対する他者の

影響を明らかにすることは喫緊の課題と理解できる。宇佐川（2007a：40；2007b）は、感覚と運動の高次化理論において、情動調整について単に気分を盛り上げるのではなく、情動を高めすぎた過剰な興奮にならないような配慮や鎮静的なかかわりをすることの重要性を示し、情動の適正域を踏まえたかかわりの必要性を言及している。また、香野（2015：10-11）は、情動の適切な範囲とは一定のものではなく、活動や場面、関係性などによって変動することを強調し、いつもおとなしく情動を抑制していれば、調整できているというわけではないとする。これら宇佐川、香野の見解は、不安定さや困難さの背景にある情動も単に抑制されるべきものではなく、適正に保つことで外界を志向する、活動や場面の参加や学びを促す働きを有する存在であることを示している。

富澤（2016）は、他者の介入による情動調整が困難であった自閉症幼児に対し、触覚、固有感覚、前庭感覚を通して伝わる身体感覚に働きかける活動を行い、情動的コミュニケーションの形成支援を行った。富澤の事例は、身体感覚への働きかけを通して、対人意識が高まり、情動調整を求めるコミュニケーションが成立する過程が示されており、身体を介した外界へのかかわりが最も基本的なコミュニケーション手段となっていることがわかる。

名倉（2012）は、情動的交流遊びや情動共有を伴う共同行為の困難さを示した事例の考察を通して、情動調整の発達を促すためには、情動の共有に向けた支援の重要性を示している。名倉は支援者と自発的にやってみたいと思う遊びを通して情動の共有経験を積み重ね関係性を築いた後、支援者を支えにした成功体験や快情動の共有、そして支援者を支えとした失敗経験を乗り越える経験を通して、情動調整が発達すると示している。名倉（2012）の示す失敗経験というのは興味深い記述である。情動調整の困難さを示す事例として、〈できる－できない〉という二極の評価ではなく、成功体験を積み重ねる中で、あえて意図的に小さな失敗経験の機会を導入し、乗り越える方略を獲得していくプロセスを導入している。この点は、ASD児の情動を扱う研究において新たな視座を与えてくれている。障害児・者の発達を支えるうえで、二者関係における楽しい、できた、わかる、といった比較的ポジティブな情動がもつ意味は十分に検討されてきたものの、失敗経験つまり葛藤を伴うネガティブな情動がもつ意味については十分取り上げられていなかったように思われる。

ASD児の保育者への愛着関係が移行する際に葛藤が有効であることを明らかにした研究もある（狗巻 2010）。また劉・榊原・中村・江角・高橋・盛・清水・津田（2011）は、ボランティアとして接したASD児へのかかわる者として遭遇したパニック場面に際し、ASD児にかかわる者自身が経験する葛藤の描写を通して、葛藤には個と個を引き寄せあったという積極的な意味づけをした研究を行った。これらの研究を総合すると、ASD児当事者、かかわる他者の身、いずれにおいても葛藤が生じており、葛藤により関係性の質的变化がもたらされることを意味するものと考えられる。関係性の質的变化といえば、名倉（2012）の事例は、失敗経験という葛藤が愛着関係を土台に乗り越えたとも解釈しなおすことができる。

## V. 発達初期段階の情動における身体性

情動がそもそも、ただ個人内に有するわけではなく、“外”へ向かうことが前提とされる、つまり外界に開かれたものとしてとらえられた見解がなされていることはすでに述べたが、現実には、障害児の発達臨床において、定型発達児では乳児期早期からみられる、他者と微笑みあう、なだめあうという情動共有や情動調整は成立しがたい（宇佐川 2002：9）。

障害児の発達臨床において、宇佐川（2002, 2007a, 2007b）は、内に向かう情動、外に向かう情動という枠組みの視座を与えている。発達初期にみられる内に向かう情動は外界遮断や混乱に向かいやすく、外に向かう情動は不安、恐れといった形で表現されるという。微笑みあう、なだめあうといった関係性未成立の要因としては、前庭感覚、固有感覚、触覚といった身体感覚を用いた外界への向かう力の躓きが、緊張や混乱をまねき、身体を介した交流を難しくすると指摘する。ASD児を育てた母親の手記には、生後間もなくから、抱きづらさをはじめとする育児の困難さを抱えながら子育てをしていることが示されている（高橋 2010）。

加えて、従来の障害児の情動の不安定さは、こだわりやパニック、自傷・他傷等、行動上の問題として考えられることが多かった。池畑（2009：1）は、行動上の問題や状態像は、何らかの不安の表れではあるが、根本的な不安感の所在や余蘊、予後などは事例によりさまざまであると指摘している。できる限り、事例の臨床像を具体的に記述し、事例間での経年変化や対応の共通性を見出すことが重要である。そして、臨床的にも情緒不安の強弱は、ASD児の中でも明らかに差があり、必ずしも発達段階だけが要因であるとは言えないという見解を池畑（2009：1）は示している。

筆者は、池畑（2009）の見解を受け、まだ外界への志向性もなく混乱を呈した発達初期段階の自閉症幼児の情動の臨床経過を整理した（横田 2015；2016）。当初、発達初期段階であり、療育者からのかかわりが混乱や不快を誘発するような状況の連続であった。とにかく空間で絶えず動き回っていた児に対し、不快対象はすぐになくし、空間に自分で身体を定位できるポジションをその都度設定するかかわり、手ごたえを得やすい教材を準備することで、次第に空間内にとどまることが可能となり、混乱に変容が見られた。発達初期段階では、混乱を予期できないことが多いが、一回一回の混乱要因を発達的に理解していくことに意味があったと考える。また、人－人の関係、人－物の関係の際に観察される姿勢や体の使い方が変容することと合わせて、内に向かいやすかった情動が外へ向かい始めて、表出された動きと情動が一致し始めた様子が明らかとなった。発達初期段階の自閉症児の情動が混乱から安定へと直線的に移行したというよりも、むしろ情動が揺れ動きを伴って、動きや表現と一致しながら育まれていく様子が明らかとなった。

筆者（横田 2015；2016）、冨澤（2016）、池畑（2009）いずれの事例研究でも共通して、身体という要素が見出された。これはASDの情動理解とその発達支援の方向性として身体へのかか

わり体験が意味をもつと言ってよい。

一方で、社会性や情動共有経験が強調される研究においては、人-人の直接的関係が過大視される傾向にある。しかし、すでに述べたが、感覚の問題を有するASD児にとって、他者との接触が脅威になる事例も少なくない。また、ASD児は、他者の動きに引き付けられる傾向が弱いこと(千住 2014)、臨床的にも志向性の中心が、人とかかわりよりも物とかかわりになりやすいという事実がある。宇田川(2015:55)は、物とかかわりから人とかかわりに移行することが可能か実践事例を通して考察した。児の物の世界を追究することの楽しさや心地よさを共に味わうという情感を伴って物の世界が見えた時、物の世界から人の世界が見えてくる道筋が生まれ、移行の可能性を見出すことができるとし、かかわり手の実践の丁寧な見直しを強調している。

同様に、筆者(關 2012)も人への志向性の芽生え前で、事物への志向性が強いASD児の臨床経過を通して、事物の志向性や、事物に対して生じる情動の動き、不快-快を保障することで、徐々に療育者へと志向性が見え始め、情動表現が明確になった経過をまとめた。その中でも事物操作の終わり方という認知的側面との関連で情動のあり様が変化していることが見出された。情動は人との関係性の発達に限らず、事象の理解といった認知の発達にも関与しているとするTrevvarthen [鯨岡訳 1989:102-162]の主張と重なり、身体性や認知といった他領域との連関は念頭に置く必要がある。

## VI. 結果と考察

以上、本稿ではASD児の情動に関する先行研究を整理し、研究動向を明らかにし、今後の研究課題について検討を試みた。以下、本稿で明らかになったこと、及び今後の課題についてまとめる。

まず、ASD児の情動に関する研究動向として、ASD児の情動が欠如していること、情動の障害や定型発達児との差異が強調された研究から、差異は否定できないが環境をととのえた療育的なかかわりの中で情動を育む研究へと移行してきていることが明らかとなった。つまり、定型発達児の示す明確な情動反応と差異はあるものの、個々の子どもなりの発信やかかわりは確かに意味を持って存在しており、情動をくみ取る大人の存在(Bates 1975:205-226)や安心できる他者(Sigman & Ungerer 1984:231-244)によって、情動的つながりを可能にすると考えられる。

次に、近年の研究動向を概観することで明らかとなったASD児の情動研究に関する以下四点の課題について述べる。一点目は、社会性という枠組みの中で情動的なつながりの重要性が強調されており、他の発達領域との連関について言及されていないことである。発達において情動が、認知や言語などの複数の領域が相互に関連し合いながら発達がなされていくことが明らかとなっている(Trevvarthen 1993)が、現在のASDの情動研究や支援方法は、情動を基盤とした社会

性の領域の問題として、既定の枠組み、言い換えれば定型発達児の発達の観点から事象を評価し、介入や対応を方向づけており、各々のASD児の発達理解や領域の連関性については十分に報告されていない。ともすれば、情動共有がなされ、情動調整を獲得したから問題行動がなくなったといった解釈に陥ることが予想される。

二点目は、ASD児の情動調整の困難さの実態を明らかにし、外在的及び内在的調整の様相を明らかにすることである。定型発達児の情動調整研究に比べると、ASD児の情動調整に関する実証的、実践的研究は十分と言えない。加えて、狗巻（2010）、名倉（2013）が情動共有から情動調整へと向かう道筋や二者関係の発達の中で、葛藤が何らかの役割を担っていくという臨床実践に基づく見解は、ASD児の情動調整の発達プロセスについて明らかにする重要な示唆を与えるものとする。ASDの情動にまつわる問題が、ASD特性として理解されやすく、問題行動として対症療法的に扱われること（關 2012）を踏まえ、質的な研究によって丁寧に個別性を捉えることで、ASD児の困難さの実態理解につながるであろう。

三点目としては、情動のもつ身体性を明らかにする研究の必要性である。綾屋・熊谷（2010：14-42）の述べる身体感覚の曖昧さや、身体と内面のずれは大きいことが記されており、身体や感覚との関連性もASD児の発達において無視できないことがわかった。また、乳幼児期早期の育てにくさ（高橋 2010；中沢 2001）の背景に、別府（2013）が示すASD児の情動調整形成メカニズムの身体感覚の過敏性も影響していることが予想される。実際、事例研究により身体へのかかわり体験が意味をもつことが見出されており（横田 2015；2016、富澤 2016、池畑 2009）、乳幼児期早期より、育てにくさの背景にある情動共有・情動調整の問題の早期的介入や発達初期段階の混沌とした状態への理解や支援に情動の身体性が糸口になると考える。

そして、四点目として、関わる大人を含めた二者関係としてASD児の情動を理解する研究が望まれる点である。養育者の情動反応の読み取り（別府 2013）、かかわる大人の情動的関与（吉井・長崎 2006）によってASD児の関係性が変化しうるものであるならば、かかわる者の態度がいずれにおいても外せない視点である。情動のつながりにくさや情動調整の困難さは家族や支援者に介入の難しさを感じやすく、療育相談場面においては対応困難場面としてしばしば話題に上る（富澤 2016：111）が、実際はASD児自身の問題として焦点を当てた研究が多くを占めている。しかし、情動のつながりにくさや情動調整の困難さをASD児とかかわる大人との関係性の視点で捉えることで、困難さの理解や支援の可能性が拡がることが期待できる。今後は、かかわる大人を含めた二者関係のなかでASD児の情動を理解する視点も必要であろう。

近年のASD児の情動研究の動向を整理する中で、個別の事例検討を扱ったものは存在するものの、客観的行動単位でとらえる方法論に比べると少なさは歴然であった。ASD児の個別性が高い調整不全の表れという臨床的見解（池畑 2009）やASD児なりの発信、かかわりは確かに意味を持って存在している事実（關 2010：47）を踏まえると、ASD児の情動の様相や発達の理解

は客観的な行動単位でとらえる方法論では限界がある。よって、ASD児の情動研究においては、個別性を丁寧に捉える事例研究による方法論を用いて明らかにしていくことが求められる。

## 文 献

- American Psychiatric Association. 2013, *Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders Fifth Edition*, American Psychiatric Association. =2014, 高橋三郎・大野裕監訳『DSM-5 精神疾患の診断・統計マニュアル』医学書院。
- 綾屋紗月・熊谷晋一郎 2010 『つながりの作法—同じでもなく違うでもなく—』NHK出版。
- Bates,E., Camaioni,L., & Volterra,V. 1975, The acquisition of performatives prior to speech. *Merrill-Palmer Quarterly of Behavior and Development*. 21, 3, 205-226.
- 別府 哲 1991 「自閉性障害児の発達と指導—愛着の形成, 遊び, 自我の発生との関連による事例検討—」『岐阜大学教育学部研究報告 人文科学』39 : 117-134.
- 別府 哲 1996 「自閉症児におけるジョイントアテンション行動としての指さし理解の発達: 健常乳幼児との比較を通して」『発達心理学研究』7(2) : 128-137.
- 別府 哲 2001 「ライフサイクルという視点から見えるもの」『みんなのねがい』404 : 38-43.
- 別府 哲 2005 「自閉症の社会性の発達における機能連関の特異性」『児童青年精神医学とその近接領域』46(5) : 489-498.
- 別府 哲 2006 「高機能自閉症児の自己理解の発達と支援」『発達』27 : 47-51.
- 別府 哲 2013 「自閉症児と情動—情動調整の障害と発達」『発達』34 : 66-71.
- 別府 哲 2014 「発達障害研究の展望と意義: 心理的側面を中心に」『臨床心理学』14(3) : 326-330.
- Bowlby,J. 1969, *Attachment and loss: Vol.1. Attachment*. NY: Basic Books. =1976, 黒田実郎・大羽 葵・岡田洋子訳『母子関係の理論 I 愛着行動』岩崎学術出版社。
- Connie,K., Stephanny,F., Tanya,P., Connie,W., Susan,K., & Amanda,G. 2005, Early Intervention on core deficits in autism. *Clinical Neuropsychiatry*, 2, 6, 380-388.
- Connie,K., Stephanny,F., & Tanya,P. 2006, Joint attention and symbolic play in young children with autism: a randomized controlled intervention study. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*. 47, 6, 611-620.
- Eisenberg, N., Hofer, C., & Vaughan, J. 2007, "Self-Regulation, Effortful control, and Their Socioemotional Correlates." In J.J.Gross (Ed.), *Handbook of Emotion Regulation*. New York : Guilford Press. 157-172.
- Emde,R.N. & Sorce,F.J. 1983, "The Rewards of Infancy : Emotional Availability and Maternal Referencing." In Call,J.D., Galenson,E., & Tyson,R.L. (Eds.), *Frontiers of Infant Psychiatry*. =1988, 小此木啓吾監訳『乳幼児精神医学』岩崎学術出版社. 25-48.
- Emde,R.N. 1989, "The infant's relationship experience: Developmental and affective aspects." In A

- J.Sameroff & R.N.Emde (Eds.), *Relationship disturbances in early childhood: A developmental approach*. NY: Basic Books. =2003. 小此木啓吾監修『早期関係性障害—乳幼児期の成り立ちとその変遷を探る』岩崎学術出版社.
- 遠藤利彦 2013 『「情の理」論：情動の合理性をめぐる心理学的考究』東京大学出版会.
- Goods,K.S., Ishijima,E., Chang,Y.C. & Kasari. 2013 Preschool Based JASPER Intervention in Minimally Verbal Children with Autism: Pilot RCT. *Journal of Autism and Development Disorders*. 43, 1050-1056.
- Gross,J.J. 2008, "Emotion regulation." In M.Lewis, J.M.Haviland-Lones, & L.F.Barrett (Eds.), *Handbook of Emotions 3<sup>rd</sup>*. New York: Guilford Press. 497-512.
- Gross,J.J., & Thompson,R.A. 2007, "Emotion regulation: Conceptual foundations." In J.J.Gross (Ed.), *Handbook of Emotion Regulation*. New York : Guilford Press. 3-24.
- Gutstein,H. 2000, *Autism/Aspergers: Solving the relationship puzzle*. Future Horizons. =2006, 杉山登志郎・小野次朗監修『RDI：対人関係発達指導演法』クリエイツかもがわ.
- 浜田 恵・辻井正次 2015 「発達障害における早期療育の必要性—JASPERについて—」『アスペハート』14, 2 : 18-21.
- Hobson,R.P. 1993, *Autism and the development of mind*. Hove: Lawrence Erlbaum Associate. =2000, 木下孝司監訳.『自閉症と心の発達：「心の理論」を越えて』学苑社.
- 池畑美恵子 2009 「発達障害幼児の情緒不安に関する臨床的研究（1）身体へのかかわりを介した初期段階の事例」『発達臨床研究』27 : 1-12.
- 狗巻修司 2010 「自閉症幼児の保育者への愛着の形成過程」『障害者問題研究』38, 1 : 68-77.
- 井上洋平 2005 「自閉症児に対するふり遊び研究の成果と課題」『立命館人間科学研究』8 : 29-40.
- 伊藤良子・近藤清美・木原久美子・松田景子・小島真美 1991 「母子の情動的交流遊びが自己認識とコミュニケーション活動に果たす役割—自閉的障害が疑われた幼児に対する集団指導での母子遊びを中心に—」『東京学芸大学特殊教育研究施設報告』40 : 95-103.
- 伊藤良子 1998 『障害児と健常児における遊びとコミュニケーションの発達』風間書房.
- Joseph and Tager-Flusberg. 1997, An Investigation of Attention and Affect in Children with Autism and Down Syndrome. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 27, 4, 385-396.
- 金丸智美・無藤 隆 2004 「母子相互作用場面における2歳児の情動調整プロセスの個人差」『発達心理学研究』15 : 183-194.
- 金丸智美・無藤 隆 2006 「情動調整プロセスの個人差に関する2歳から3歳への発達の変」『発達心理学研究』17 : 219-229.
- 金丸智美 2017 「乳幼児期における情動調整の発達」『淑徳大学研究紀要』51 : 51-66.
- Kanner,L. 1943, Autistic disturbances of affective contact. *Nervous Child*, 2, 217-250. =1978, 十亀史郎, 斉藤聡明, 岩本 憲訳『幼児自閉症の研究』黎明書房.

- Kasari,C., Sigman,M., Mundy,P., and Yirmiya,N. 1990, Affective sharing in the context of joint attention interaction of normal autistic and mentally retarded children. *Journal of Autism and Developmental Disorder*, 20, 87-100.
- Kasari,C., Sigman,M.D., Baumgarther,P., & Stipek,D.J. 1993, Pride and masery in children with autism. *Journal of child Psychology and Psychiatry*, London, 34, 352-362.
- 小林隆児 2017 「アタッチメントと発達の問題を「関係」から読み解く」『人間科学論集』13, 1 : 383-406.
- 香野 毅 2015 「ASD児における「情動調整」から「包括的な支援」へ」『実践障害児教育』6月号.
- 黒田美保 2016 「自閉スペクトラム症の早期支援の最前線—ジャスパー・プログラムの紹介—」『臨床心理学』16, 2 : 151-155.
- 黒田吉孝 2007 「自閉症の社会性障害の研究の発展を期待して」『障害者問題研究』34(4) : 241.
- 黒山竜太・針塚 進 2003 「対人コミュニケーションに困難をもつ子どもの遊びに及ぼす背景音楽の効果」『九州大学心理学研究』4 : 233-242.
- 串崎真志・田中友梨 2009 「自閉症支援における情動共有の意義」『関西大学人権問題研究室紀要』58 : 1-10.
- 三宅康将・伊藤良子 2000 「発達障害児のコミュニケーション指導における情動的交流遊びの役割」『特殊教育学研究』39(5) : 1-8.
- Mundy,P., Sigman,M., Ungerer,J.A., & Sherman T. 1986, Defining the social deficits of autism:The contribution of non-verbal Communication measure. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, London, 27, 657-669.
- Mundy,P., & Sigman,M. 1989, The theoretical implication of joint attention deficits in autism. *Development and Psychology*, Cambridge, 6, 313-330.
- 長崎 勤・中村 晋・吉井勲人・若井広太郎 2009 『自閉症児のための社会性発達支援プログラム—意図と情動の共有による共同行為—』日本文化科学社.
- 永瀬 開 2017 「自閉症スペクトラム障害者における情動調整に関する研究動向—使用する情動調整方略と介入方法に注目して—」『人間環境科学研究』15, 1 : 35-44.
- 中沢たえ子 2001 『障害児の心の臨床—知的・情緒的障害児とその親の心—』岩崎学術出版社
- 名倉一美 2012 「発達障害児の情動共有と情動調整の支援に関する一考察 (1) —情動調整に困難を抱える自閉症児に対する製作遊び支援の実践分析から—」『浜松学院大学教職センター紀要』1 : 67-79.
- 大藪 泰 2004 『共同注意—新生児から2歳6か月までの発達過程—』川島書店.
- Prizant,B.M., Wetherby,A.M., Rubin,E., Laurent,A.C., & Rydell,P.IJ. 2006, *The SCERTS Model*:

- A Comprehensive Educational Approach for Children with Autism Spectrum Disorders. Volume1 Assessment.*  
Paul H. Brookes Publishing Co.
- 李 熙馥・田中道治・田中真理 2010 「自閉症児における情動交流遊びにおける共同注意行動の変化」『東北大学大学院教育学研究科年報』58, 2: 213-216.
- 劉 小賀・榊原久直・中村美智子・江角 彩・高橋眞琴・盛 敏・清水伸子・津田英二 2011 「インクルーシブな社会をめざす実践における葛藤の積極的な意味—自閉症児のストレス表出に対する他者の反応をめぐる考察—」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』4, 2: 39-48.
- 榊原久直 2013 「自閉症児と特定の他者とのあいだにおける関係障害の発達の変容 (2): 主体的能力・障害特性の変容と特定の他者との関連」『発達心理学研究』24(3): 273-283.
- 佐々木博人 2008 「自閉症研究のための試論—情動の重要性」『人間文化』11: 137-153.
- 關千賀子 2010 「自閉症スペクトラムの特徴をもつ幼児の始発的共同注意における情動表出」東京学芸大学大学院教育学研究科 特別支援教育専攻 修士論文.
- 關千賀子 2012 「パターン知覚水準にある自閉症幼児の情動の理解に関する一考察—事物操作の“終わり方”の変容の過程を通して—」『発達臨床研究』30: 13-21.
- 千住 淳 2014 『自閉症スペクトラムとは何か—一人との「かかわり」の謎に挑む』ちくま書房.
- Sigman, M., & Ungerer, J.A. 1984, Attachment behaviors in autistic children. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 14, 3, 231-244.
- Sroufe, L.A. 1995, *Emotional development: The organization of emotional life in the early years*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- 杉山登志郎 2002 『アスペルガー症候群と高機能自閉症の理解とサポート』学習研究社.
- 高橋和子 2010 『高機能自閉症児を育てる—息子・Tの自立を育てた20年の記録—』小学館新書
- 富澤佳代子 2016 「自閉症児の情動調整困難に対する臨床的研究—身体感覚への働きかけによる支援経過から—」『淑徳大学社会福祉研究所総合福祉研究』21: 111-121.
- 高橋範子・伊藤良子 2006 「学齢期自閉症児における対人的遊びの発達過程に関する研究」『東京学芸大学教育実践研究支援センター紀要』2: 125-134.
- 滝川一廣 2017 『子どものための精神医学』医学書院.
- Tomasello, M. 1999, "The Cultural Origins of Human Cognition": Harvard university Press = 2006, 大堀壽夫・中澤恒子・西村義樹・本多 啓『心とことばの起源を探る—文化と認知』勁草書房.
- Trevarthen, C. 1993, "The self born in intersubjectivity: The psychology of an infant communicating." In U. Neisser (Ed.), *The perceived self. Ecological and interpersonal sources of self-knowledge*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Trevarthen, C., Aitken, K., Papoudi D., & Robarts J., 1998, "Children with Autism 2<sup>nd</sup> edition Diagnosis

- and Interventions to Meet Their Needs, Jessica Kingsley Publishers. = 2005, 中野 茂・伊藤良子・近藤清美・根ヶ山光一・靱負正雄『自閉症の子どもたち—間主観性の発達心理学からのアプローチ』ミネルヴァ書房.
- Trevarthen, C., & Hubley, P., 1978, "Secondary intersubjectivity: confidence, confiding and acts of meaning in the first year." *Action, Gesture, and Symbol*. London. Academic Press. = 1989, 鯨岡 峻・鯨岡和子『母と子のあいだ』ミネルヴァ書房.
- 宇田川久美子 2015 「保育の場における自閉症スペクトラム傾向のある子ども心の育ち—「二人称アプローチ」による情感を共有する」『発達』144 : 45-50.
- 宇佐川浩 2002 「認知発達臨床からみた関係性発達論再考—発達臨床における心理臨床的視点の再検討」『発達臨床研究』20 : 3-22.
- 宇佐川浩 2007a 『障害児の発達臨床Ⅰ：感覚と運動の高次化理論からみた子ども理解』学苑社.
- 宇佐川浩 2007b 『障害児の発達臨床Ⅱ：感覚と運動の高次化による発達臨床の実際』学苑社.
- やまだようこ 2010 『ことばの前のことば—うたうコミュニケーション』新曜社.
- Yirmiya, N., Kasari, C., Sigman, M., & Mundy, P. 1989, Facial Expressions of Affect in Autistic, Mentally Retarded and Normal Children. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 30, 725-735.
- 横田千賀子 2015 「重度自閉症幼児の情動に関する臨床的研究—C児の1年目の外界志向性とかかわり整理より—」『発達臨床研究』33 : 51-59.
- 横田千賀子 2016 「重度自閉症幼児の情動に関する臨床的研究(2)—C児の外界との接点としての姿勢・身体の使用方の変容より—」『発達臨床研究』34 : 25-34.
- 吉井勘人・長崎 勤 2002 「自閉症児に対する相互的コミュニケーション指導—共同行為フォーマットと情動共有の成立を通して—」『心身障害学研究』26 : 81-91.
- 吉井勘人・長崎 勤 2006 「乳幼児の共同行為フォーマット遂行における大人の情動的関与の役割の検討」『心身障害学研究』30 : 25-33.

## The Current State and Future Tasks of Research on the Emotions of Children with Autism

Chikako YOKOTA

Recent studies on the emotions of children with autism spectrum disorder (hereinafter, ASD) were conducted to clarify the research trends and examine the tasks for future research. The results showed that there was a shift in research trends. Previously, studies emphasized that children with ASD lacked emotions, and focused on the difference between children with ASD and those with a normal development. Subsequently, studies moved into the realm of developing the emotions of children with ASD through therapeutic interaction in a managed environment. This study identified the following four points as tasks for future research: 1) the examination of the link between emotions and other developmental areas, 2) uncovering the difficulties children with ASD have in adjusting their emotions and the state of external and internal adjustment, 3) the necessity of research clarifying the physicality that emotions have, and 4) the necessity of research that clarifies the emotions of children with ASD as a dyadic relationship.

Keywords: autism spectrum disorders, emotion, emotion sharing, emotional adjustment, developmental support